

第 8 回 天然アユ生態調査実行委員会議事要旨

1. 会議概要

○日 時：平成 30 年 11 月 6 日（火）14:00～16:00

○場 所：豊田市職員会館 3 階 第 1 部室

○出席者（規約の名簿順）

（アドバイザー）高橋 勇夫（たかはし河川生物調査事務所 所長）

（アドバイザー）村上 哲生（中部大学 教授）

（アドバイザー）内田 臣一（愛知工業大学 教授）

（アドバイザー）赤堀 良介（愛知工業大学 准教授）

（委員長）加藤 重雄（矢作川漁業協同組合 代表理事組合長）

（委員）新見 克也（矢作川天然アユ調査会 会長）

（委員）神本 崇（国土交通省 中部地方整備局豊橋河川事務所 事業対策官）

（委員）大木 克彦（愛知県 豊田加茂建設事務所 河川整備課長）

（委員）早川 匡（豊田市 河川課 課長）

（委員）中川 啓二（豊田市矢作川研究所 所長）

（事務局）豊田市矢作川研究所

○議 事

1) 前回議事録の確認（資料 1）

2) 矢作川河床改善によるアユの生息環境の回復（資料 2）

3) 天然アユの産卵環境改善（資料 3）

2. 議事録要旨

（1）前回議事録の確認

事務局が資料 1 をもとに説明。

（委員）クレンジング区においた土砂の粒度分析はこれから取組む。

（2）矢作川河床改善によるアユの生息環境の回復

事務局が資料 2 をもとに説明。

■主な意見等

（委員）2018 年 10 月出水が河床に及ぼした影響はまだ把握できていないか。

（事務局）10 月 30 日にマーカー礫の確認、河床の粒度組成を調査し、地形測量はこれから行います。

(委員) 7月の急激な水温の低下はアユにストレスを与え、病気の発生につながる可能性もある。矢作ダムの選択取水装置の操作の影響はあるか。

(事務局) 水位・水温ロガーは9月上旬の出水で数十メートル流されたが、その後、問題なく記録しているので、水温の値は信頼できると考えています。水温が急低下した要因の一つにダム操作も関わっている可能性があります。また、この急低下が生物へ影響していることも考えられます。

(委員) H30 礫置区でアユがなわぼりを形成しなかったのは生息密度が低すぎる可能性がある。生息密度はどれぐらいか。

(事務局) 8月以降、1平方メートルあたり0.5尾程度です。

(委員) それぐらいあれば、なわぼりを作ってもおかしくない。

(事務局) 友釣り調査の結果から、8月下旬までなわぼりが形成されなかったが、このタイミングは盆明けにアユが釣れ始める矢作川中下流のパターンと似ています。原因にアユが餌を食む場がなく、アユの成長が遅滞していることが関わっていないでしょうか。

(委員) アユが盆明けまで釣れない川が全国的に増えてきた。水温が安定する8月にならないと、アユがなわぼり形成に向かわない。サイズの大きいアユが急に消える現象、水温の変動や冷水病と関わっているのかもしれないが、原因はよくわからない。

(委員) ダム下流で生産力が低いのはなぜか。

(事務局) コケ植物が生えて、アーマー化がより進行した場所だからと考えている。

(委員) 付着藻類の種組成やシルト分の量はどのような状況か。

(事務局) 種組成はこれから分析します。シルト分はあまりなく、付着膜はそれほど発達していないが、絶対量が少ない状況でした。

(委員) 新しい河床を造成してもアユが集まる効果が長続きしないのは残念。アユや底生動物にとって良い河床は、毎年、礫を置き直さなければならない。何を次にしたら、このような場所が良くなるのかを考える必要がある。

(事務局) 次年度にかけてソジバで不足しているデータをとるとともに、次のステップとなる計画をこの委員会で検討していきます。

(委員) 本当にソジバが悪かったのかを他の数地点と比較し確認する必要があるのでは。

(事務局) 検討していきます。

(委員) 流程の光合成活性の比較は観測日の光環境を反映させると良いのでは。

(事務局) 袋法を実施した際、現地で光強度を測定しているので、そのデータを使い、光条件を補正します。

(3) 天然アユの産卵環境改善

事務局が資料3をもとに今年度の計画を説明。

■主な意見等

(委員) 産卵場調査が2週間に1度となっているが、同じ日に調査するのか、地点毎に巡回するのか。

(事務局) 地点毎に巡回します。

以 上